

青野繁雄 著

書 評

1 型糖尿病と歩こうー “この子” への療養指導

松浦 信夫(北里大学小児科教授)

わが国の子どもの1型糖尿病の発症率は低く、結果として社会的認知が得られにくい状況にあります。そのため、1型糖尿病の子どものための解説書は非常に少なかったのですが、最近では日本糖尿病学会、日本小児内分泌学会、国際小児思春期糖尿病学会(ISPAD)などのコンセンサスガイドブック、外国の翻訳本、小児糖尿病専門医による解説書が出版されてきています。このようななか、青野繁雄先生による『1型糖尿病と歩こうー“この子”への療養指導』が出版されました。青野先生はご夫婦で大阪市立大学小児科の糖尿病部門の責任者として、長い間小児1型糖尿病の診療にあたられてきました。現在は寺田町こども診療所を開設され、多くの糖尿病患者さんの診療にあたっておられます。さらに、日本糖尿病学会、日本糖尿病協会小児糖尿病対策委員会、厚生労働省糖尿病研究班など数々の公的な仕事もされ、また近畿地方の糖尿病小児のサマーキャンプにもかかわってこられました。

青野先生が糖尿病児ならびにそのご家族の心の問題を核にして診療されている様子は、学会の発表などからも十分にうかがえます。1型糖尿病のように、慢性的の病気をもった本人ならびにご家族の心理的な負担は計り知れないものがあります。あまりに厳格にしても、また放任にしても、療養うまくいきません。これまでの小児1型糖尿病の解説書の多くは1型糖尿病とは何か、インスリン量の調整法、シックデ이의対応など、日常の診療に必要なことの解説が中心でした。子ども本人ならびにご家族の心理的な面を含めた解説書は少なかったように思います。一方、先生の姿勢が十分に表された本書は、子ども本人ならびにご家族の心理的な面を含めた解説書です。冒頭の“はじめに”に書かれている言葉には、

まさしく出版にあたってのこの点における青野先生の気持ちが表れています。

1型糖尿病のような慢性疾患に対する治療の動機付けで最も大切なのは、最初に診断したときの主治医の話し方、説明にあるといわれています。それが、その後の病気に対する気持ち、態度を決めると言っても過言ではありません。この本のなかにみなぎっている思いは、長い間にたくさんの患者さん、ご家族の方々から受けた経験からにじみ出てきたエッセンスのように思われます。タイトルで1型糖尿病の「治療」ではなく、「療養指導」という語を使用されたのも、そのような思いが背景にあるようです。療養指導の基礎的なことをこの本の前半部分にお書きになられたのも、先生の気持ちを表しているものと思います。

目次構成も乳児、幼児、学童、思春期と、成長過程にある各年齢層の子どもへのアプローチのしかたから入っていて、とてもわかりやすく読みやすい本です。特に医療者が一番診療に苦慮する「問題のある子ども」への対応のしかたは、1型糖尿病を専門にしているわれわれにも大いに参考になる点です。

この本が思春期以上の患者さんおよびそのご家族はもちろんのこと、将来糖尿病の専門医をめざす若い小児科医、現在小児糖尿病を診療している小児科医、あまり小児糖尿病を経験していない内科糖尿病専門医など多くの方に読まれることを願っています。また、学校の現場で1型糖尿病児の生活を支える養護教諭、担任教師にもぜひ読んでいただきたいと思います。

(A5判 184頁 定価3,150円(本体3,000円+税5%))
2003年 医学書院 刊